

平成 28 年度 各種調査結果を活用した学力保障の取組事例

事務所名	沿岸南部	学 校 名	住田町立有住中学校	TEL	0192(48)2020
------	------	-------	-----------	-----	--------------

生徒の実態に応じた授業改善 ～一人一人の考えを交流,共有する授業を通して～

【今年度の目標】

- ① 中2の国語の「言語事項」の領域の正答率50%以上にする（少なくとも個々の結果を1年時より向上させる）。また、「目的に応じて文章の構成や展開,表現の仕方を意識して読む」力を付け,正答率80%以上にする。
- ② 中2の数学の「数と式」の領域の正答率を60%以上にする。
- ③ 中2の英語の「対話文」の正答率を50%,「長文読解」の正答率を60%以上にする。
- ④ 中2県学調,中3全国学調の質問紙の「授業内容がよく分かる」の肯定的な回答(回答1・2番)を各教科とも70%以上にする。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】

- ① 教科担任で上記各種学力調査の分析を行い,落ち込んでいる内容について,事後の補充指導の時期や方法を考える。また,全体で共通している課題を探り,全教員で共通理解し改善に努める。
- ② 全教員で3年全国学調・新入学生学調・2年県学調・学習アンケート(校内)の質問紙を分析し,生徒の実態を把握し,事後の手立てを考える。
- ③ 今年度研究主題「一人一人の考えを交流,共有し,よりよい考えに高めていく授業を通して」の推進を図りながら,「わかる授業」になるように校内研究会の充実を図る。

【具体的な取組】

(1) 教科の分析と課題解決を図るための取組

ア NRT,全国学調,新入学生学調の分析を実施後1か月以内に行った。落ち込んでいる内容の事後指導をいつどの場面で行うかを教科書のページ数で記入し,そのページに付箋を貼ることで,確実に事後指導を実施するように努めた。

(分析例:新入学生学調 数学の授業改善方策シート抜粋)

↓の内容 ※県比-10ポイント以下,正答率低(50%未満)	↓の内容や正答率が低いものをいつどこで補充するか
(領域別) 数と式(県比-1.2,正答率73.1%)	年間通しての計算練習(既習事項の復習)
(小問) 10 2つの数量の関係の表し方の理解(-22.0)	数量の表し方(1年p74) 連立方程式の利用(2年p49)
12 たこ形の面積を求めること(-12.4,55.6%)	平面図形(1年p153)
13 面積を求める式が表す図形を読み取る(50.0%)	数量の表し方(1年p76),おうぎ形(1年p165～), 表面積(1年p199)
22 基準量と割合をもとに比較量を求めること(55.6%)	数量の表し方(1年p74)
23 比較量と割合をもとに基準量を求めること(38.9%)	連立方程式の利用(2年p49)
31 資料をもとに判断し,自分なりに説明すること(38.9%)	資料の活用(1年p218～)

イ 分析を受けて各教科で具体的な取組を考えた。(例:数学の取組)

- ・ 各種学力調査で落ち込んでいる領域について,定期的に復習する機会を全ての学年で設ける。
- ・ 日常生活に関わる数学の問題を取り上げ,数学の有用感をもたせる。
- ・ 既習事項の復習プリントを作成し,授業と連動した家庭学習に取り組みさせる。
- ・ 授業内で「数学的な考え」を出させる機会をつくり,全員が授業に参加する雰囲気作りをする。

ウ 各教科の分析から,全体での課題の明確化を図った。(例:NRT分析)

- ・ アクティブラーニングを取り入れている社会の結果がよい。→授業参観し,他教科でも取り入れる。
- ・ 基礎的・基本的内容の通過率が7割程度しかない。→既習事項の確認を単元の前,授業の導入時に行う。
- ・ 活用の問題の通過率が3割未満。→授業内で取り上げる場面を増やす。

エ 昨年度の正答率との比較を行った。(例:県学調)

- ・ 考え方を問う問題(活用)の正答率が低い。
→授業内で理由を問う場面を増やすとともに,考えを交流・共有し合う場を設定する(校内研究の実践)。
- ・ 生徒が変わっても同じ内容で落ち込みが見られる。
→教師自身の指導の苦手な内容であるととらえ,今まで以上に教材研究を行う。

(2) 質問紙の分析と課題解決を図るための取組

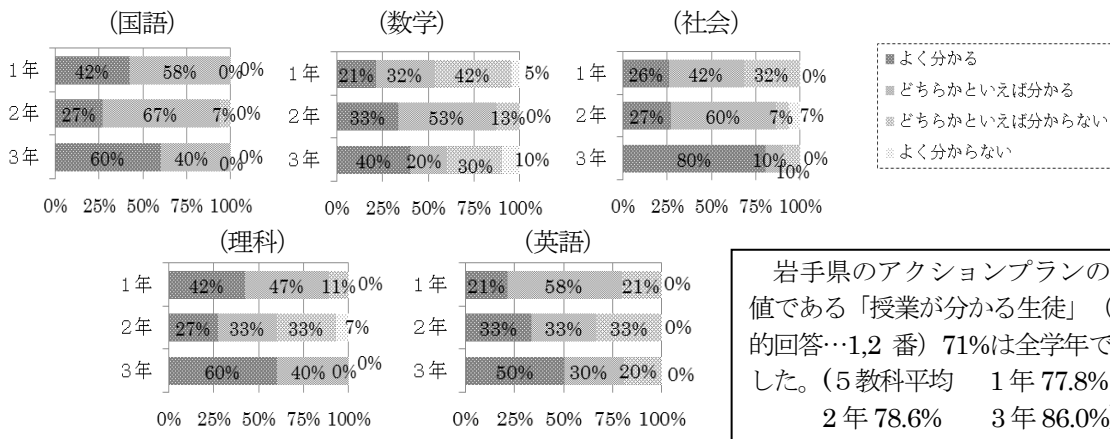
ア 4月に実施した全国学調・新入学生学調の質問紙調査の結果を分析し、今後の校内での取組に生かした。

- ① 「学校の宿題をしている」3年100%
 - ⇒自主学習（家庭学習ノート）から教師が課題を示す家庭学習（宿題）へ移行。
 - ・ 授業で毎時間宿題を出し、教科担任がチェックする。（授業と連動した家庭学習）
 - ・ 教科の宿題をやりきらせるために家庭学習ノートのページ数のノルマをなくする。
- ② 「家で復習をしている」3年90.9%(全国51.0%)、「家で予習をしている」3年45.4%(全国34.2%)
 - ⇒予習的課題も取り組ませる。
 - ・ 家庭学習ノートの内容の例に、意味調べ等の予習の仕方も提示した。
 - ・ 予習をしている生徒のノートを紹介する。
- ③ 「自分にはよいところがある」の肯定的回答(1,2番合計)1年44%(県72%)
 - ⇒自己肯定感を高めるため、校内研究「考えを交流・共有する授業」の実践。

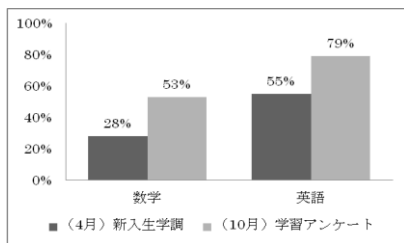
イ 10月に実施した調査結果を分析し、今後の指導に生かす。

① 「授業が分かる」

i) 1年・3年 本校学習アンケート 2年 県学調から

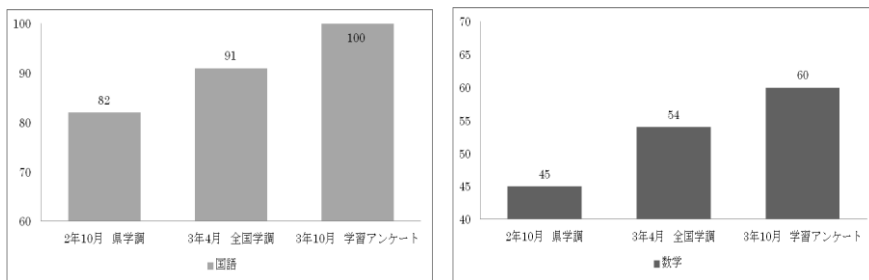


ii) 1年新入学生学調「授業が楽しみ」→10月学習アンケート「授業が分かる」肯定的回答の変化



新入学生学調の結果と比較すると、「授業が楽しみ」とあまり思っていなかった数学や英語で、「授業が分かる」の肯定的回答が増加した。

iii) 3年「授業が分かる」肯定的回答の経年変化



国語、数学ともに肯定的回答が増加した。

(要因) 毎月の職員会議で「住田町わかる授業」の推進を全教員で確認し、実践してきた成果と考えられる。

(参考: 住田町わかる授業)

- (1) 本時の目標に即した学習課題が設定され、学級全体で共有されている。
- (2) 生徒が課題解決に向けて意欲的に学習に臨んでいる。
- (3) 生徒一人一人の考えを生かした授業になっている。
- (4) 自身の学習を振り返る（「分かった」と実感する）場が保障されている。

また、「学習課題」の設定と「振り返り」をより意識するために、すべての教室に「学習課題」「振り返り」のマグネットを常備し、全教科で活用するように努めた。

② 「平日の学習時間」

(考察) 本校「学びフェスト」の学年ごとの家庭学習の時間の目標は以下の通りである。

1年生…60分以上
2年生…90分以上
3年生…120分以上

全校で目標に達している生徒は半数に満たなかった(2年生も60分がほとんどだった)。

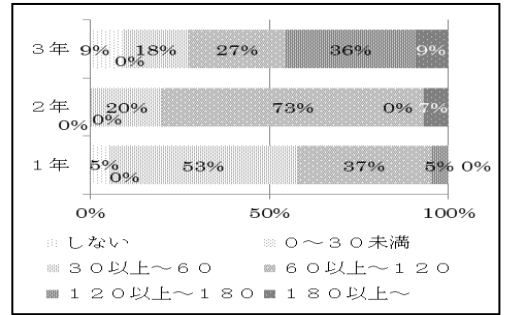
宿題としての家庭学習の習慣は身につけている生徒が多かったので、「時間いっぱい取り組む」ことを意識させるために、11月から家庭学習の取り組みを見直した。

(右下の生徒への配布資料参照)

全校に対して、研究主任から家庭学習について以下のようにガイダンスを行った。

- i) 下校(17:10)後の生活時間を確認し、個人で学習時間を決める。
- ii) 家庭学習の目的を確認する。
- iii) 学習時間内で、教科の宿題を最初にやり、時間が余ったら自分の苦手なところや予習などを「家庭学習ノート」を使って取り組む。

※自分のためになる学習を時間いっぱい取り組むように指導した。



家庭での学習について

1 学習課題の確認

有中の「学びフェスト」の家庭での学習課題の目標は以下の通りです。

平日 1年生60分 2年生90分 3年生120分

◎家に帰ってからの生活時間を確認し学習課題を確認しよう。

17 18 19 20 21 22 23 24

2 家庭学習の目的

- (1) 授業の内容を定着させるため。(宿題)
- (2) 苦手な内容を克服するため。(家庭学習ノート)
- (3) 高校や大学などに進学しても自らすすんで学ぶ習慣をつけるため。(家庭)

(3) 校内研究の充実

ア 今年度の研究主題

基礎的・基本的な内容の定着を図る学習指導
～一人一人の考えを交流、共有し、よりよい考えに高めていく授業を通して～

(研究主題に迫るための方策)

① 考えを交流、共有する場面の設定 (第1回 1年理科)

実験結果をまとめる時に考えを交流、共有する場面を設定する。自己肯定感の少ない生徒たちなので、自信をもたせるために、自分の考えを書かせてから発表させることや交流の場面で考えが「多い」ものや「なるほどと思った」考えも書き加えた後に全体で共有するようにする。

② 生徒の実態に合わせた指導形態の工夫 (第2回 2年社会)

学習に対して意欲の高い生徒たちなので、レベルの高い課題を用意した。2つの資料を個人で分析し、グループで考えを交流する中で、根拠のある考えを選択する。さらに全体で考えを共有する中で、よりよい考えに高めていく授業を目指す。また、自分の考えに自信がもてない生徒が数人おり、グループ内で考えを発表し、周りに考えを認めてもらうことで自信を付けさせる。

◎ 上記①、②を参考に「一人一人の考えを交流、共有し、よりよい考えに高めていく授業」を提案する。(第3回 3年数学…予定)

イ 校内研究会の進め方

1つの研究授業について、前述の「住田町わかる授業」の観点に沿って全教員で役割分担(板書、時間配分、課題設定、生徒の様子、発問・指示、振り返り)をし、授業を参観した。

【授業参観の視点】

- ・ 導入、展開、終末の時間配分…指導案の時間通りに進んでいたか。生徒の考える時間、交流する時間を確保できたか。
- ・ 板書…板書計画通り書かれているか。生徒の思考の流れに沿った板書になっているか。
- ・ 課題設定…本時の目標に即した学習課題が設定されているか。問題解決型の課題になっているか。
- ・ 生徒の様子…課題解決に向けて意欲的に学習に臨んでいるか。困っている生徒への支援が適切に行われたか。
- ・ 発問、指示…生徒一人一人の考えを生かした授業になっているか。すべての生徒が分かる指示になっているか。
- ・ 振り返り…自身の学習を振り返る(「分かった」と実感する)場が保障されているか。

ウ 校内研究会の様子(例：2年社会校内研の記録から)

時間配分：資料を個人で分析する時間、グループ内で交流する時間がしっかり取られてよかった。その分全体でまとめる部分が少し足りなかった。

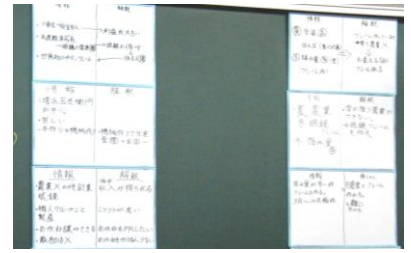
板書：生徒の考えを書いたホワイトボードを貼り、その言葉を使って「まとめ」の文章にしたことがよかった。

課題設定：教師が提示した資料から、生徒に「何を考えたいか」を2,3人に問い、そこから学習課題を設定する流れがよかった。

生徒の様子：課題が分かりやすく、教師の指示も明確だったので、生徒は意欲的に考えていた。

発問・指示：指示が分かりやすかった。アクティブラーニングを意識し、生徒の発言を大事にしていた。メインとなる部分の前に一人一人に言わせる場面を取った分、メインの時間がタイトになってしまった。

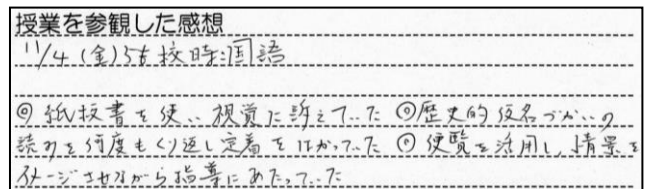
振り返り：生徒が書いたホワイトボードの字が小さかったので、貼らない方法でまとめをし、振り返りにつなげてよかったのかも。自分の地域と比較して考え、自ら調べる生徒になるように育てたい。



◎ 活発な意見交換がなされた。他教科の授業についてなかなか発言できないこともあるが、役割分担をすることでそれぞれの授業を見る視点がはっきりし、校内研究会に参加しやすくなった。

エ 授業交流週間

- ・ 1週間自由に見合える期間を取り、他の教員のよい実践を参考にする。
- ・ 授業者には良い点を中心にコメントする。



【成果】

(1) 「今年度の目標」に対する達成状況

- ① 2年国語「言語事項」…正答率 82.4%
「目的に応じて文章の構成や展開、表現の仕方を意識して読む」…78.3%(文学作品), 53.3%(説明的文章)
言語事項では、「生きてはたらく言語」であるという意識も併せて指導した。また、効果的な漢字練習の方法、多様性をもつ言葉の読み方、身近に題材をとった短文づくりを行った。文法指導では理解しながら規則性を学べるような自作のプリントを活用した。
- ② 2年数学「数と式」…正答率 64.2%
前年度の県学調で「数と式」の正答率が低く、次学年でも落ち込みが予想されたので、調査対象の学年以外での補充指導・授業改善を行うとともに、既習事項の復習プリントを作成し、授業と連動した家庭学習に取り組ませた成果と考えられる。
- ③ 2年英語「対話文」…正答率 52.2% 「長文読解」…正答率 41.7%
対話文の向上は、普段の授業でのクラスルームイングリッシュや帯活動での疑問詞や不規則動詞を取り入れたQ&Aを継続して取り組んできたことや、IET (International Education Teacher:住田町独自採用の国際教育教員) との授業で主に言語活動やパフォーマンステストを中心に行ったことの成果と考えられる。
- ④ 「授業内容がよく分かる」では、3年数学のみ70%の目標に達せられなかったが、10月の学習アンケートや前年度県学調との経年変化では、分かる生徒が増加した(2年県学調 45% → 3年学習アンケート 60%)。少人数であることを生かし、対話を中心とした授業の組み立てをし、全員が授業に参加する雰囲気作りを継続して行ってきたためと考えられる。

(2) 学力保障の取組に対する全教員による組織的な対応

管理職による日常の授業参観とその後の情報交換等で把握した学力保障上の課題を、運営委員会で検討した上で授業改善の視点等について毎月の職員会議で取り上げ全体の共通理解を図った。また、課題解決の方策を具現化するために研究主任を中心に校内研究会等のもち方を改善したことにより下記のことについて成果として確認できた。

- ① 「今年度の目標」が達成できたのは、4月に実施されたNRT、全国学調、新入生学調の分析を実施後すぐに独自に行い、落ち込んでいる内容を早めに把握し、事後指導を早めに行えた結果と考えられる。達成できなかった内容についても早期に原因を分析し、事後指導に努めている。
- ② 全教員で質問紙を分析することで、より生徒の実態を客観的に把握し、研究授業の指導案に生かすことができた。また、家庭学習の取組の工夫など、新たな取組を推進することができた。
- ③ 「授業がわかる」と肯定的に回答した生徒が4月に比べて増加したのは、研究主題の「一人一人の考えを交流、共有し、よりよい考えに高めていく授業」を全教員で推進できたからだと考えられる。職員会議での働きかけや役割分担をして研究授業を参観することで充実した校内研究会にすることができた。